

【発達障がいは発達する～食事編①～】

A B C定食支援という支援方法がある。その方が大好きな特定のメニューのみを抽出して、それがおよそ3食分になるので、それをA定食、B定食、C定食として、そのメニューを繰り返し提供する食事支援方法である。自閉症スペクトラム障がいの方々が多くが抱えている感覚障がい、特に「味覚」に焦点を当てた支援方法である。

A男さんの感覚障がいは多岐にわたっている。彼の入所前情報はこんな具合だ。

「風が吹き始めると必ず学校の窓を閉めて回る・触覚過敏？」、「野球帽をいつでもかぶっている、靴下を上まできちんと引っ張って履いている・頭と足は触覚鈍麻？」「学童期まではちょっとした変化や集団活動で泣いてばかりいた・視覚過敏、聴覚過敏？」「高温のお湯での入浴は苦手・温冷感覚過敏？」「ジュースは飲まずいつでお茶を飲んでいる、インスタント焼きそばはソースをかけないで食べる、ハンバーグのデミグラスソースは洗い落とししてから食べる・味覚過敏？」etc.

彼のパニックは大変だった。手が出る、足が出る、物を投げる、対象は当たりかまわずだった。母親も支援職員も身体障がい重度の方も対象となった。

小さな我慢が、一我慢には、必ず怒りや悲しみの感情がともなっているのだが、その感情の放出される場所や時間が上手に提供されていなければ、その蓄積の連続は、やがて場所や時間を選ばずに大爆発するようになる。

小さな爆発を繰り返していれば、大爆発には至らないという活火山の爆発モデルを「心の器」と重ね合わせるとすれば、自閉症スペクトラムの方々のパニックはそんなふうに説明できる。

さて、小さな我慢の除去を、まずは「味覚過敏」から始めてみよう。

「ハンバーグのデミグラスソースを洗う」「インスタント焼きそばのソースをかけない」という行動から推測できることは、彼の「味覚過敏」は相当の重度であることである。だとすれば、ハンバーグや焼きそば以外に「食べてはいるけれど、彼にとっては過剰に我慢しているメニューがあるはずだ」と考える。

「みそ汁は、食べる時と残すときがある」「カレーライスはいつも食べるスピードが遅い」…、しょっぱい、辛い等、味の濃いものはやはり苦手なのだ。「食事の後にはいつも水道の水を飲んでいることが多い」などの観察が現場から上がってまくる。その都度、彼と相談して、「嫌い」「食べない」を確認しながら、支援が進んでいく。おそらく食事後の飲水は、口の中に残る濃い味を消すためにやっているのだろう。

イヤを伝え、それを支えてくれる支援環境の中で彼の意思を伝えようとするエンパワメントはさらに進む。しかし、支援が進み嫌いな（不快な）メニューが増えれば増えるほど、給食では食べるものが無くなっていってしまう。そこでA B C定食支援である。食事を快経験で満たす、それが目的である。今までの彼の食事は、おそらく不快経験と我慢であろう。

A定食は何もつけないトースト食パン、フランクフルト、ポテトサラダ、B定食はふりかけご飯、焼き鮭、チキンナゲット、C定食は、ソース無し焼きそば、とんかつ、エビフライと決まった。もちろん調味料無しである。どうしてもメニューはインスタントや冷凍食品ばかりになってしまい、健康面では栄養のバランス、食品添加物などの問題があるのだが、ここは止む無しと考えた。それは、このA B C定食支援が10年、20年、あるいは一生続かないという経験則があるからだ。かの神田橋條治先生が、「発達障がいは発達する」と述べられているわけだが、「発達障がいは、＜適切な支援さえあれば＞発達する」のであって、感覚障がいであってもその例外ではない。「適切な環境」とは紛れもない支持的な環境、あるがままを認めてくれる環境を指す。

A男さんのA B C定食支援は、およそ一年間続いたが、その頃から他の支援も相まって、ポツポツと給食のメニューを欲しがるようになり、その後数ヶ月の内にA B C定食支援を抜け出している。

気がつけば、彼のパニックの姿は激減している。脳みその成長もあり、心理的な成長もあり、ということだろうか。